

防衛研究所長開会挨拶

防衛研究所長の大越です。シンポジウムの主催者としてご挨拶申し上げます。

本日はご多用な中、平日にもかかわらず、このように多数の方々のご来場をいただき、御礼申し上げます。

防衛研究所がこのような公開の場でシンポジウムを開催しますのは、本年 1 月に「21 世紀初頭の北東アジアの戦略環境」をテーマとして、ジョセフ・ナイ先生等をお招きして以来、2 度目のことであります。従来は、国内外の研究者を招待し、原則非公開の研究会を開催しておりました。けれども、近年の国内における安全保障問題に対する関心の高まりを背景としまして、こうした研究会を防衛研究所だけのものにするのではなく、広く一般の皆さまにも公開して、ご質問やご意見を賜りますとともに、日本における安全保障問題をめぐる論議を深めるうえで有意義な材料を提供できればという願いを込めて、このように公開の場でシンポジウムを行うこととした次第です。

今回は「21 世紀の戦争と平和 20 世紀を振り返って」というテーマを取り上げましたが、その狙いを簡単に申し述べたいと思います。

20 世紀は「戦争の世紀」であったとは人口に膾炙されているところですが、21 世紀を目前に控えた今、次の世紀の戦争と平和がどのようなものになるのかを考えることは意義のあることだと思われま

す。19 世紀の戦力均衡が崩れ、大量殺戮兵器が登場したことにより、主要参戦諸国が総力を挙げて戦い合った第一次世界大戦が勃発しました。この第一次世界大戦によって 20 世紀の開幕が告げられたわけですが、引き続く第二次世界大戦と合せて、今世紀の前半の戦争は総力戦を特徴とするものでした。今世紀後半は大量の核兵器を備えた米ソがグローバルに対立し合う冷戦の時代でありましたが、核の手詰まりの中、米ソの熱戦こそなかったものの、イデオロギー対立や民族自決の要求などを

背景に、朝鮮戦争、ベトナム戦争、中東戦争など、発展途上国において数多くの地域紛争の勃発を見ました。2度の世界大戦、引き続く多くの地域紛争を顧みますと、20世紀が「戦争の世紀」と言われる所以がよくわかります。

現在、私たちは冷戦が終結してから10年を迎えているわけですが、グローバルな規模の武力紛争が生起する可能性こそ遠のいたものの、民族上や宗教上の問題に起因する複雑で多様な地域紛争の発生を目の当たりにしています。同時にそのような中、先進諸国が人権尊重の理念を掲げて人道介入する新たな傾向も現れています。一方、先進諸国における情報・通信技術の高度化に支えられた軍事技術の発達や人命尊重の流れの中で、戦争の様相が著しく変化しつつあるところです。

以上のような冷戦後になって見られる変化の趨勢は、21世紀の戦争と平和に何をもたらすのでしょうか。

本シンポジウムは、戦争史や戦略論の著名な先生方をお招きして、20世紀を顧みつつ来るべき次の世紀の戦争と平和について総合的に議論しようとするものです。21世紀を目の前に控えた今日、今世紀を総括する多くの企画や催しが行われておりますが、本シンポジウムは戦争に焦点を当てているのが大きな特色であると言えます。

本日から明日にかけて、会場の皆さまを含めまして活発な議論が行われ、本シンポジウムから来世紀の戦争と平和について何らかの示唆を見出すことができればと思っております。

最後に、重ねてご多忙中にもかかわらず本シンポジウムにご来場いただきました皆様にご心より御礼申し上げます、開会の挨拶とさせていただきます。

平成11年10月7日
防衛研究所長
大越 康弘